

がんばれ！ママさん選手

山崎恵司

プロ野球取材を専門にしているのに、
 どういうわけか、バルセロナ・オリン
 ピックの取材チームに入ってしまった。
 十四年目になるスポーツ記者生活で、
 オリンピックへ行くのは初めてのこ
 慣れ親しんだプロ野球とは違い、取材
 対象は、ほとんどがアマチュアだし、

しかも男性ばかりでなく、女性もいる。
 勝手が分からないわずらわしさもある
 が、いつもは取材できない競技者たち
 (特に女性選手)に話を聞けるのは、
 楽しみだ。

事前準備の一環で、ライフル射撃の
 五輪代表最終選考会へ行ったとき、記
 者としての(というよりWSFジャ
 ン広報委員としての、というべきか)
 好奇心を刺激する選手に、出会った。
 千種寿代さん。ご存知の読者もいるか
 もしれないが、日本では珍しいママさ
 ん選手である。

千種さんは、一九八八年のソウル五
 輪に次いで二度目の出場だ。種目はピ
 ストル。ソウルでは長谷川智子さんが
 銀メダルを獲得した種目として覚えて
 いる方も多いのではないだろうか。当
 時、長谷川さんとはライバルとして、
 しのぎを削った間柄。しかし、ソウ

ル五輪の後に結婚し、家庭に引きこも
 てしまった長谷川さんとは対照的に、
 千種さんは一九九〇年に長男を出産し
 た後も競技生活を続行した。今回の日
 本選手団ではたった一人のママさんと
 して、注目を集めている。

職業は、警察官。得意の語学を生か
 し、外国人容疑者を取り調べる際の通
 訳を担当している。夫も同じ埼玉県警
 の警察官。遠征や合宿などのとき、2
 歳の長男は千種さんの母親が世話する
 ことになっているという。もちろん、
 こうした周囲の協力や理解に恵まれて

いる面はあるが、なにより大事なのは
 千種さん自身が妻、母、警察官の役割
 をこなしながら、競技を続けようと決
 意していることである。『ご主人がや
 さしいから、できるんだ』とか『おば
 あちゃんが助けてくれるから、続けら
 れる』と、安直に結論づけるのは正し
 くない。特別に、千種さんが恵まれて
 いるわけではなく、彼女がそうしな
 と思ったからできたのだ。もっと、マ
 マさん五輪代表がでてこなければ、不
 自然ではないだろうか。

女性スポーツは、女性の社会参加が
 どれだけ進んでいるか、を映し出す鏡

なにより大事なのは選手自身が競技を
 続けようという意志を持つこと。周囲
 の協力や理解だけでは、ママさん選手
 は育ってこない。

だと思う。バルセロナでは、四年前の
 ソウル大会より十四の女子種目が増え
 て八十六種目になる。世界的に女性の
 スポーツ愛好者が増えているためで、
 その背景には、女性の地位向上がある。
 結婚し、出産を経験した女性が国際的
 な大会で活躍するのも、もはや珍しく
 ない。だが、日本では千種さん一人。
 先進国とか、経済大国とかの形容詞を
 つけられる国にしては、寂しい現実だ。

なぜ、日本ではママさん選手が少な
 いのか。その理由は、簡単。結婚する
 と、競技を止めて、家庭に入る人が多
 いからだ。競技を続けたくてもいろん



▲ライフル射撃五輪代表 千種寿代さん
 ©共同通信社

な事情で続けられない、というケース
 よりも、自分の意志で止めてしまうケー
 スの方が圧倒的だろう。社会環境より
 も、女性競技者のスポーツや結婚生活

に対する考え方に原因がありそうな気
 がする。自分で取材したわけではなく、
 推測でしかないが、保守的な結婚観に
 女性競技者がしばられ、結婚相手の男
 性もそれを期待しているのではないだ
 ろうか。いずれにしても、千種さんに
 続くママさん選手がもっと出てきてほ
 しいし、女性指導者ももっと増えなけ
 れば、おかしい。有能な人がいっぱい
 いるはずなのに、結婚や出産で、そん
 な才能を犠牲にするのはもったいない
 と思う。

最後に海外のオリンピックの話を一
 つ。WSFジャパンニュース(第十
 九号)のインタビューに登場してもらっ
 た女子バスケケットボールのリネット・
 ウグダードさん(大和証券)が三度目
 の五輪出場をかけ、米ナショナルチー
 ムの選考会に挑戦。五十三人のなかか
 ら選抜された十八人に残ったが、残念
 ながら最後の代表十一人には残れなかつ
 た。しかし彼女のチャレンジ精神には
 敬服する。現在三十二歳。『バスケッ
 トを続けたい』まさにこの気持ちだ
 と思う。

へやまざきえいじWSFジャパン会
 員、共同通信社運動部記者